『神に近くいることの幸せ』詩篇73：26-28

73:21 わたしの魂が痛み、わたしの心が刺されたとき、
73:22 わたしは愚かで悟りがなく、あなたに対しては獣のようであった。
73:23 けれどもわたしは常にあなたと共にあり、あなたはわたしの右の手を保たれる。
73:24 あなたはさとしをもってわたしを導き、その後わたしを受けて栄光にあずからせられる。
73:25 わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。地にはあなたのほかに慕うものはない。
73:26 わが身とわが心とは衰える。しかし神はとこしえにわが心の力、わが嗣業である。
73:27 見よ、あなたに遠い者は滅びる。あなたは、あなたにそむく者を滅ぼされる。
73:28 しかし神に近くあることはわたしに良いことである。わたしは主なる神をわが避け所として、あなたのもろもろのみわざを宣べ伝えるであろう。

●序論
この章の冒頭に「アサフの歌」とあります。彼はおそらくダビデとソロモンに仕えた神殿楽隊長、”ミュージックパスター(音楽に秀でた牧師)”と言えるかもしれません。
そんな彼のこの歌は素晴らしい告白で始まります。
　73:1 神は正しい者にむかい、心の清い者にむかって、まことに恵みふかい。
アーメンです！・・・　でもこの後、「しかし…」となるのです。
　　73:2 しかし、わたしは、わたしの足がつまずくばかり、わたしの歩みがすべるばかりであった。
　　73:3 これはわたしが、悪しき者の栄えるのを見て、その高ぶる者をねたんだからである。
　簡単に言うと、「ねたみ」で彼はつまずいていた。悪い人たちがその悪行で繁栄しているのを見て、自分の貧しさと比較し、心を腐らせてしまっていたのです。

妬みは人を腐らせます。アサフの経験から、ゆがんだ妬みを抱くなら、すなわち神様につまずいてしまう…ありさまが、ここには描かれています。
そういう腐っていくような心からの癒しと回復。それが描かれているのが今日お読みしている73篇です。

●本論
Ⅰ．腐る心のいやし
元日夕方能登半島での大きな地震があり、日本国中の人が、お正月気分を一気に吹き飛ばされたのではないでしょうか。
　　それから数日して、29年前に起こった阪神・淡路大震災のさなかの被災する中で語られた一人の牧師の礼拝メッセージ集を読み返しています。
あの時も、多くの人が、住む家や財産、そして家族、友人を失った。将来を時間を失った…、そこで大きな傷を受けたことを思い出させる本です。
　小さな地震さえ、ほとんど経験のなかった関西の人間にとってあれは衝撃でした。

失ったものの大きさと、崩れ去った家々、だれを恨んだらいいのか、何にこの怒りを投げつ語らいいのかわからない…というような、そんな姿です。

人の心は「なぜ？自分たちはこんな目に？」という思いが募った、近代で初めての災害のであったのではないかと思います。

73:21 わたしの魂が痛み、わたしの心が刺されたとき、
73:22 わたしは愚かで悟りがなく、あなたに対しては獣のようであった。

はじめて･･･、だから戸惑うし、動揺するし、荒れるのでしょう。
当時の被災の現場や支援の現場。そこでは一言で言えば人も心も荒れていました。

日常が変わってしまった。わたしはそんな風に感じていました。でも先の説教者は、こう言います。

「この度の地震で、『日常と非日常』とは、いつも同居していることをこれほどまで知らされたことはありません。

当たり前の日常に、得体のしれない非日常がある時突然襲ってきたかのように見える。
それは、場面は違いますが、主イエスさまに従う弟子たちも、そういう経験をしました。

彼らは、闇の中から突然現れた兵士たちにイエスさまを捕らえられ、そしてあれよあれよというううちに裁判がなされ、あの十字架でイエスさまが殺されていくのをもくべ帰したのです。

けれども、そんな彼らにはすでにイエスさまからの言葉があったと語られます。

「わたしはよみがえって、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」と。

イエスさまの十字架の死によって悼む弟子たちより先に、ガリラヤの日常に立って待っていてくださるのが、よみがえりの主イエスさまです。

今日読んでいるアサフは、ある意味腐り行く荒れた心、信仰を捨ててしまいそうなほどの失意に覆われた心でした。

そんな彼が癒しと回復を経験する。それは、彼がよく考えて自分で過ちに気づいたから…というものではありません。
17節以降、まず彼の癒しは、聖所に来たとき始まったことが記されます。
それは、礼拝の中で、神の言葉を聞いて回復されていく経験でした。

それを彼はこう表現しています。

新改訳）:23 しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。

その礼拝の中で、その臨在の中で、神さまがわたしの右の手を摑まえていてくださった、引き上げてくださったという、神の言葉の経験です。
ここで、腐る心の癒しにつちえ。それはまさに神のもとにこそある。そのことを覚えましょう。

Ⅱ．神信頼を回復する

（新改訳）:21 私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、

:22 私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。
:23 しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。
:24 あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。

この聖書箇所は、クリスマスの特別賛美「我が心の岩」の歌詞そのものです。

♪心が悲しみ 苦しんでいた時に　あなたはいつもすぐそばにいた
目の前に暗闇が襲って来た時も　あなたはずっと離れずそばにいた
私の右手をしっかりとつかみ　決して離さなかった

聖書ではこう続きます。

（新改訳） 73:26 この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。

賛美にはこうありました。

♪この身と心が尽き果てても　あなたはわが心の岩

見たくない経験したくない苦しい現実がたとえ襲ってきても、わたしたちはそこでこの神を再発見することができます。

♪･･･そこに、あなたはいつもそばにいた。…あなたはずっと離れずにそばにいた。
そして、「わたしの右の手をしっかりつかみ　決して離さなかった」と。

アサフを回復したのは、聖所での礼拝。そこでの御言葉の語り掛けと体験でした。
まさに私たちの与えられている礼拝の祝福をここで知ることができるのです。

Ⅲ．神に近くあることを幸せとする

:26 わが身とわが心とは衰える。しかし神はとこしえにわが心の力、わが嗣業である。
:27 見よ、あなたに遠い者は滅びる。あなたは、あなたにそむく者を滅ぼされる。

これはそのままの意味です。わたしの心は弱い。衰える。けれども神こそが永遠にわたしの心の力、受けるべき祝福であると。
さらに、神さまから遠くいる者、背を向ける者が、たとえ今この世でどんなに繁栄を享受しているように見えても、永遠の視点から見るならば、滅んでいく者だと。

そうして、アサフはこう語るのです。

:28 しかし神に近くあることはわたしに良いことである。
（新改訳）:28 しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。
（♪）私にとっては　あなたの近くにいることが幸せ

ここには、この世の不条理ゆえの妬み、いらだちから解放された心が描かれています。
ただ神に近くあることが、わたしにとっての幸せであると。

あの失意に覆われていたはずのアサフが、この幸せを経験して歌い上げています。
その幸せは、アーメンと応答して近づく者に与えられるものです。

さいごに）

この７３篇は、その最初にこの告白から始まりました。

73:1 神は正しい者にむかい、心の清い者にむかって、まことに恵みふかい。

ただその直後に「しかし･･･」と自らの心を蝕む、妬みごころを告白し、神さまへの信頼を失いかけたような経験をもありのままに表しています。
そんな彼を回復したのは、神御自身が彼の右の手をとってくださった、離さないでいてくださったからでした。ここに神の真実があります。
これが恵みです。神に背を向けようとする者にさえ手を伸べられる。それはまさにイエス・キリストの十字架からあらわされるわたしたちへの愛の御手です。
73:28 しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。
そして実際に近くいることの祝福を経験していただきたいのです。
そうして、その感動のもとでこの詩篇７３篇は最期を締めくくります。
私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。
経験し、いただいた恵みを、語り伝える者とされたい、証しする者とされていきたい。その証できる喜びを体験していたい。そういう思いを新たにすることができれば感謝です。